2015年1月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第456号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

地方新聞社の本を一堂に

「全国新聞社ふるさとブックフェア」の現在・過去・未来

文・全国新聞社出版協議会事務局／武藤 寿隆

2014年7月、長野市・平安堂長野店で開催された「全国新聞社ふるさとブックフェア」

２０１４年１０月１５日午前１０時、東京・新宿の紀伊國屋書店新宿本店３階のレジ前に全国の新聞社３４社の出版物およそ１３００冊が展示された。１７年ぶりに東京で開催された「全国新聞社ふるさとブックフェア」のスタートだ。

並んだ本は歴史、偉人伝、観光案内、グルメ、鉄道などのテーマをそれぞれの地域の視点で描いた力作ばかりだ。ある新聞社のコーナーで次々に本を手に取り、じっと見入る中年男性の姿があった。その地の出身者なのかもしれない。

共同通信社とその加盟社の出版部門は全国新聞社出版協議会（以下出版協）を組織している。出版事業の活性化と情報交換を目的として１９７２年設立、現在は北海道から沖縄まで新聞社やその関連会社４６社で構成されている。年２回例会を開き各社が出版活動状況を報告。成功例・失敗例を話し合うなど貴重な情報交換の場となっている。

また年１度、出版現場の人たちが集い、時を忘れて語り合う「出版実務者会議」もある。さらに２年に１度、多くの社が活発に展開している自費出版本を一堂に集めて審査し「ふるさと自費出版大賞」を授与している。

そんな出版協の重要なイベントの一つが「全国新聞社ふるさとブックフェア」（以下ブックフェア）である。各地の新聞社と地元の書店が連携して企画し、加盟新聞社に参加を呼びかけて“ふるさとの本”を集め、１ヵ月近く展示・販売する。「地方新聞社の出版物を全国各地の書店で紹介しよう」というのがこのブックフェアの基本スタンスだ。

◎準備は１年前から

第１回ブックフェアは１９９０年、京都新聞社の呼びかけで丸善天満橋松坂屋店で開かれ、３０の加盟新聞社が参加した。

９５年には新潟日報事業社（新潟日報社の関連会社）、信濃毎日新聞社、北國新聞社でも開催。翌９６年には河北新報社や神戸新聞総合出版センター（神戸新聞社の関連会社）が加わり、その後西日本新聞社、中国新聞社、北海道新聞社、秋田魁新報社、愛媛新聞社などへと広がっていく。これまでにブックフェアを開催した新聞社は出版協加盟４６社中２１社にのぼる。

毎年開催している新聞社はともかく、初めてブックフェアに取り組む新聞社はおよそ１年前、遅くても半年前には準備を始める。書店との綿密な打ち合わせが必要になる。何よりも大事なことは「全国の新聞社が発行する書籍・雑誌が一堂に会するきわめてレアで貴重なイベントであること」を書店にアピールし理解してもらうことだ。もちろん、１ヵ月近く書店のスペースを占拠するわけだから、販売実績も重要だ。ブックフェアのスタート当初、京都新聞の担当者は「とにかく地元新聞社の本が売れますよ」と書店に力説したそうだが、過去のデータを見ても概ねその傾向にある。

◎担当者たちの熱き心

ここでブックフェアを開催したいくつかの新聞社の声を紹介しよう。

１９９６年から毎年（０３年は除く）開催している河北新報出版センター（河北新報社の関連会社）の水戸智子さんは、ブックフェアで大事なこととして「①事前準備は万全に　②メディア等への告知　③期間中の商品管理の徹底」を挙げる。①も③も大事だが、ブックフェアの成否を分けるのは②のＰＲ活動だ。自社の新聞紙面はもちろ

ん、地元放送局、タウン誌などに告知や取材を依頼する。チラシ配布も欠かせない。今年８月下旬から熊本の金龍堂まるぶん店でブックフェアを開催した熊日出版（熊本日日新聞社の関連会社）の市村隆典さんは新聞社２社、放送局４社、出版業界の専門紙２紙に告知を依頼。「会期中テレビ局の取材が入り、番組に映された本はよく売れました。ＰＲ活動の大切さを実感しました」と語る。

今年２０年ぶりに長野・平安堂長野店でブックフェアを開催したのが信濃毎日新聞社。最近のブックフェアでは異例の大きな売り上げを記録した。同社の山崎紀子さんは「ずばり販売機会の創出が目的でした。ブックフェアは他社の本の力を借りて、自社の本を改めて売り込む絶好の機会でもあるわけです。それに地方の本をその土地以外で売るのは難しい時代ですから、来場者には全国各地にはこんなすばらしい本があるんですよと知ってもらう姿勢が大事だと思います」

そのためには、ただ集めて並べればいいというものではない。山崎さんは「開催前に何度も書店担当者と打ち合わせをし、フェアの趣旨や規模を説明し、書店さんの集めたい本も聞き、売り場の配置を検討しました」。本の搬入・設営日には売り場に行って“棚割り”もやったという。全国の新聞社に声をかけ、参加を募り、本を送ってもらう以上、１冊たりともおろそかにはできない。ブックフェアを開催する新聞社の共通の思いである。

昨年初めてブックフェアを開催した栃木県の下野新聞社。喜久屋書店宇都宮店での展開だ。同社の嶋田一雄さんは「出版協の例会に参加して感じたのは、他のエリアの人たちと日常的に情報交換が出来る場があることへの感謝でした」。その一方で、「われわれは安易に“出版不況”や“電子書籍”を理由に書籍の販売活動を怠っているのではないか。栃木県が京都や信州のような全国的な観光地ではないとの理由で自社の本の価値を低く捉えていないか」と反省。そして、「自分たち（下野）も全国の出版仲間の本を手にしてみたい」との思いから開催に踏み切ったという。

事前の準備は他社と同様で、専用ホームページの開設、各社の一押しの本にはオリジナルのコメントを入れたオビの作成、他のメディアへの売り込みも多岐にわたった。期間中は「ちょくちょく書店に足を運び、棚の整理や品薄本の追加注文をお願いしました」。さらにライバル関係にある書店にも行き、「ブックフェアを覗いてみてくださいよ」と伝え、「いつか一緒にやりましょう」と“種まき”もしたそうだ。

◎いつでもどこかで

出版不況といわれて久しい。新聞社の出版部門も例外ではない。いや、専門出版社より厳しさは切実だ。いずこも少数のスタッフで出版の灯を守り続けている。しかし、西日本新聞社の「ペコロスの母に会いに行く」（岡野雄一著）が２０万部を超える大ヒット作になったという、出版の醍醐味も間違いなくある。

ブックフェアの今後について前出河北新報出版センターの水戸さんは「来店するお客様にいかに満足してもらえる内容にするかが問われていく」という。インターネットで何でも調べられ、本が買える時代。希少価値だけが“売り”の時期は終わった。

下野新聞社の嶋田さんは「いつでもどこかでブックフェアが開かれるような環境になればいいですね」と言い、続けて「新聞社だけでなく、地元出版社やタウン誌とコラボするとか、近隣エリアだけで頻繁にミニフェアを開催するとかすれば、ブックフェア全体に機動力が出てくると思います」。さらに「版元の大小が、発行する書籍の優劣を決めるものではない。地方新聞社の中の小さな出版部門が持つ矜持を感じ取っていただくのもブックフェアの意義ではないでしょうか」。

地方創生が日本の将来に不可欠とされる中、ブックフェアはその一翼を担うイベントと言っていいだろう。

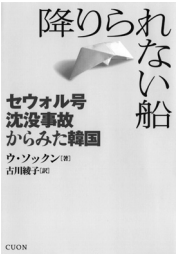
２０１５年１月３１日から、盛岡の東山堂イオンモール盛岡南店でブックフェアが開催される。岩手県では初めてで、主管は岩手日報社。２２番目の開催社である。

（むとうとしたか・㈱共同通信社情報事業部／全国新聞社出版協議会事務局）

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率８%）表示です。

『降りられない船　ーセウォル号沈没事故からみた韓国』●ウ・ソックン著／古川綾子訳



300余名もの命を奪ったセウォル号沈没事故。犠牲者の多くが前途ある高校生であることに胸が痛む。当局は船長と乗組員に懲役刑を言い渡し、オーナーの死をもって幕引きを図っているようにすら見える。なぜ多くの乗客は安全に船から降りられなかったのか。この惨事をもたらしたものは、韓国社会が抱える構造的なひずみにあると著者は捉える。

早く安い移動にはＬＣＣいう方法もあるのに、近年教育当局は修学旅行にフェリーの利用を指示するようになった。特定の政治的、経済的な意図があってのことではないかと言う。日本の中古船を改造し、契約社員の船長で運航させる。不完全な危機管理システム、状況判断の失敗から海洋警察も機能を果たし得なかった。訳者のあとがきに、著者が冗談交じりに、これまで書いた本の中で一番売れなかったと聞き、それなら日本から発信すればいいと応えたと記されている。日本が抱える課題でもあるように思えてくる。

◆ 1620円・四六判・215頁・**クオン**・東京・2014/10刊・ISBN978-4-904855-26-3

『菅浦文書が語る民衆の歴史　－日本中世の村落社会』●長浜市長浜城歴史博物館編

本書は、菅浦集落が重要文化的景観に選定されたのを記念して長浜市長浜城歴史博物館で開催された企画展の図録である。琵琶湖北岸に位置する菅浦は、背後に山の急斜面がせまり湖岸線に沿って家々が帯状につらなる狭小な土地にあり、現在も東西に四足門が残るなど中世の面影を色濃く残している。中世の自治的村落である「惣村」があったことで有名で、1261点にも及ぶ「菅浦文書」（重要文化財）が伝来されている。そのうち図録には36点の古文書がカラー図版で掲載されている。菅浦の住人である「供御人」（天皇家に食料などを貢納する人々）が船や積荷を押し取られたと朝廷に訴えた文書もあるが、とくに注目を引くのは15世紀半ばに起きた「文安の相論」と「寛正の相論」の顛末を記した文書である。土地をめぐる隣村・大浦荘との合戦はこの村の歴史の最大のクライマックスとでも言える出来事だった。「報復の連鎖の悲劇性」と「紛争解決への模索」は我々現代人に強烈なメッセージを伝えている。

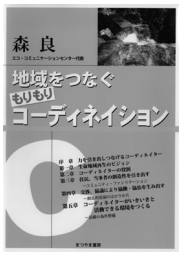
◆1620円・B５判・148頁・**サンライズ出版**・滋賀・2014/11刊・ISBN978-4-88325-551-1

『<ルポ>かわいい！　－竹久夢二からキティちゃんまで』●青柳絵梨子著

小腹を満たすために買ったブルーベリーのベーグル。かぶりつく時に本来丸いはずのベーグルがハート形をしているのに気がついた。何故食べ物をここまでかわいくする必要があるのか？　それは心のトキメキが大切だから。“ハローキティ”に代表されるように今や世界に輸出され始めた「かわいい文化」。共同通信社記者の著者が「かわいい！」をキーワードに取材した少女文化の数々。まず個性的で自立したかわいさをコンセプトに人気を博した雑誌「オリーブ」を取り上げ、読者モデルやキティラー、イラストレーターの田村セツコへのインタビュー、好きなものを気ままに撮るガーリーフォトなど、分野は多岐にわたる。実はこの文化は大正昭和時代の少女たちから脈々と受け継がれてきたもので、古くは竹久夢二に始まり、戦後「ひまわり」を創刊した中原淳一の功績も紹介。「かわいい」は女性が自分らしく輝く“生き方”であり、心を豊かにする合言葉。少女文化の奥深さを探る画期的なルポ。

◆1944円・四六判・241頁・**寿郎社**・北海道・2014/10刊・ISBN978-4-902269-72-7

『地域をつなぐもりもりコーディネイション』●森　良著



東京の一極集、地方の衰退が言われるようになって久しい。しかし、実際には自分の住んでいる地域が寂しくなっていく現状に対し、何かしたいという思いを抱えている人は多くいるはずである。けれどもそうした思いが、行政やNPOなどにすくい上げられて、具体的な活動へと結び付いていくのはそう簡単なことではない。本書はそこでの橋渡し役を担うコーディネーターの仕事について詳しく解説している。それぞれ立場の異なるNPOや企業と行政を結びつけ、あくまで住民主体となった地域の活性化策へとつなげていく。一読してそれはなかなか困難なミッションにも思える。だが本書には、コーディネーターの心構えやいくつもの具体例が収録されており、また著者が実際に行ったコーディネーター育成講座の記録も掲載されている。コーディネーターとはどうあるべきかから、どのように仕事を進めていくべきかまで実践的に学べ、それぞれの活動の場で生かせる内容となっている。

◆1620円・A５判・159頁・**まつやま書房**・埼玉・2014/10刊・ISBN978-4-89623-089-5

『今日の漫画　史群アル仙作品集』●史群アル仙著

２３歳、漫画家、クレパス画家の初の作品集、デビュー作である。すべて６コマ～１０コマからなる１ページ漫画で、当初、ツイッターで発表されたが、評判を呼び、今回の本書の刊行となったそうだ。

狼、犬、猫、鼠、兎、馬、ふくろうなどの動物や鳥と人間との交感を描いた内容が多く、トゲや毒を生む独特な雰囲気を醸し出している。いわば狂気を描くが、狂人にはなりきれない、その微妙な機微に触れることができるかもしれない。そして著者は、「自分の手で昭和の漫画の画風を現代へと引き継ぐ」と言っているが、はたしてどうだろうか。

◆1296円・四六判・179頁・**ナナロク社**・東京・2014/10刊・ISBN978-4-904292-55-6

売行良好書

期間：2014年11月16日～12月15日

［出荷センター扱い］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『評伝　赤﨑　勇　その源流』1058円・南方新社　(2)『今日の漫画　史群アル仙作品集』1296円・ナナロク社　(3)『倭城を歩く』2592円・サンライズ出版　(4)『本土の人間は知らないが、沖縄の人はみんな知っていること』1404円・書籍情報社　(5)『アルコール・薬物・ギャンブルで悩む家族のための７つの対処法　ＣＲＡＦＴ』1080円・アスクヒューマンケア　(6)『橋川文三　日本浪曼派の精神』2484円・弦書房　(7)『つながろ！』1296円・今井出版　(8)『北海道　木彫り熊の考察』3780円・かりん舎　(9)『デザインマンホール１００選』1836円・アットワークス　(10)『宮本常一の風景をあるく　周防大島東和』2700円・みずのわ出版　(11)『珈琲飲み』2592円・洛北出版　(12)『よみがえる夢野久作』734円・弦書房

［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『古本屋ツアー・イン・神保町』2160円・本の雑誌社　(2)『昭和プロレスマガジン　３４』1000円・昭和プロレス研究室　(3)『東京かわら版　１２月号』432円・東京かわら版　(4)『本の雑誌　３７９号』840円・本の雑誌社　(5)『おすすめ文庫王国２０１５』821円・本の雑誌社　(6)『奥多摩登山詳細図　西編　全１１２コース』950円・吉備人出版　(7)『張り込み日記』2916円・ナナロク社　(8)『サンリオＳＦ文庫総解説』1944円・本の雑誌社　(9)『橋川文三　日本浪曼派の精神』2484円・弦書房　(10)『高尾山・景信山・陣馬山登山詳細図』823円・吉備人出版

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『ウォークマップ　ホントに歩く東海道　第８集　袋井～舞坂』1166円・風人社　(2)『奥多摩東部登山詳細図　西編　全１１２コース』950円・吉備人出版　(3)『倭城を歩く』2592円・サンライズ出版　(4)『ペコロスの母に会いに行く』1296円・西日本新聞社　(5)『北海道　地図の中の鉄路』6480円・亜璃西社　(6)『関ヶ原合戦の深層』2700円・高志書院　(7)『<ルポ>かわいい！』1944円・寿郎社　(8)『狛犬誕生』2160円・澪標　(9)『北海道　木彫り熊の考察』3780円・かりん舎　(10)『日本海の拡大と伊豆弧の衝突』1080円・有隣堂

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼当センターは12月26日（金）で終業、年始は1月6日（月）始業です。

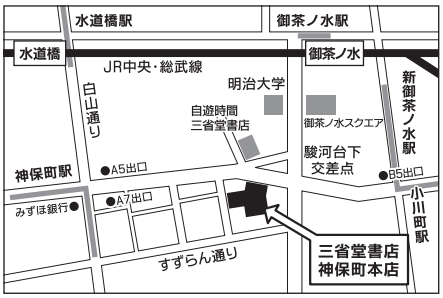
▼本年も多くの関係者の方々が亡くなりました。当センター創業時の社員、有北隆和さんが1月に、当センター設立発起人のお一人、新文化通信社元会長の丸島日出夫さんが11月に亡くなりました。当センター設立発起人は出版評論家だった故・小林一博さんはじめ23人いらっしゃいましたが、15人の方が他界されています。

▼こちらも訃報です。大阪の旭屋書店で長く働き、**「書店の店頭から」（1985年・編集工房ノア刊）**という35年間の本屋ぐらしの体験を著した海地信さんが、今年の10月に亡くなられていました。享年85才でした。日本の書店が一番輝いていた時代、関西で未知の600坪という大型書店の責任者として、東京から進出した紀伊國屋梅田店と競争しながら関西読者の絶大な信頼を得る売場を作ってきました。

郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせて頂きます。基本的にメール便は、一冊２１０円でお送り致します。（メール便の到着は、発送してから３～４日かかります。）お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合せ下さいませ。
◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせて頂きます。

★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３－３２３５－６１８２

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

BOOKS SANSEIDO
三省堂書店
営業のごあんない
神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。